

小野派一刀流



小野派一刀流の場合は、写真のように太く、鑢の丸く、反りがあまりない木刀を使用しています。これも重量は約900gで、本身とほぼ同じ重量になっています。このような形になったのは、切り落しを多用する一刀流の荒稽古に供されることを前提としているためです。これは何も一刀流に限った話ではありませんが、古流の組太刀は型といえども本当に打ち合う、つまり当たる間合いで動くのが原則であり、実際にやってみればわかりますが、間合いや体勢に対しては実にシビアです。このため、鬼籠手という独特の防具が工夫されたのですが、これによって当たる間合いで動き、しかも確実に相手を捉えてゆくことが可能になったのです。因みに鬼籠手は現在でも小野派一刀流はもとより、一刀流中西派、北辰一刀流、一刀正伝無刀流で使われています。

木刀の二尺三寸五分という寸法は小野次郎右衛門忠明の代になって、江戸城内に持ち込める刀の寸法から割り出されたものであり、それ以前は稽古には二尺八寸の刃引きを使っていたということです。現在も型によっては二尺八寸の刃引きを使う場合もあります。

現在ではこの木刀は規格品が出回るようになりましたが、昔は現在のものよりももう少し鑢の部分の部分が薄かったらしく、今でも道場によっては、昔のままの形状の木刀を自製して使っていることもあります。

写真1 木刀。打ち合いの摩擦で鑢に焦げ目が出来ている。



写真2 江戸時代の鬼籠手。修理の跡が荒稽古を物語る（笹森建美宗家蔵）。

